

文化資源学的研究とはどのようなものなのか、これからどのように発展させていくのか。これは、既存の学術研究を踏まえた新しい研究領域として構想された文化資源学に関わる研究者すべてにとって、研究基盤を考える上でも、研究の方向性を決める上でも重要な問いである。報告者は昨年以來、文化資源学会が設立されて以來のこれまでの蓄積を振り返り、この新しい学問分野がどのように発展してきたのかを、人文情報学のアプローチから考える研究プロジェクトを行ってきた。

人文情報学(Digital Humanities)とは、近年進展の著しいデジタル情報処理技術を人文的な研究資料に適用し、新たな人文学の意味や方法を生み出す実践的な研究活動である。学際性、開放性という点で文化資源学とも親和性が高いが、よりデジタル的な方法の開発に力点を置いていることがその特徴である。今回のプロジェクトでは、具体的研究データとして、東京大学大学院人文社会系研究科に文化資源学研究専攻が設立された2000年以來、学位が認定された修士論文に注目し、論文に添付されて提出された「論文要旨」と「参考文献一覧」のうち、執筆者の承諾を得られたものを分析対象としている。

十分に研究成果が蓄積された伝統的な人文社会系の学問分野には「テーマ・方法・形式」というdisciplineが存在する。もちろん、それを乗り越える変革の試みをどこまで盛り込むかがその課題であるが、練り上げられてきた伝統に一定程度沿った形で論文を作り上げることが求められる。他方、文化資源学においては明示的な「踏まえるべき伝統」は希薄である。その理由として、一つには発足以來まだそれほど時間が経っていないことがあるが、あえて体系化以前にさかのぼることを重視する学際的領域として構想されていることも大きい。それぞれの研究において先行研究として参照すべき隣接領域の研究群はあるものの、文化資源学の論文である以上、それらの成熟した体系を持つ隣接領域の枠組みにそのまま準拠することはできないのである。

それゆえ、文化資源学はすでに既存の専門分野で研鑽を積んできた研究者にとって新たなフロンティアとなるが、他方、新たに学術の世界に参入してきた人々が最初に取り組む本格的な学術論文である修士論文の場合、その挑戦はさらに根源的なものとなる。確かに、修士論文という性格上、個々の論文の「完成度」は必ずしも高くないかもしれず、本研究でも個々の論文の内容は分析の対象とせず言及もしない。しかしながら、準拠すべき明確なモデルがない中で相互に刺激しあいつつ一人一人が文化資源学の名に値する研究を追求する試みは、それらを一つの集団的な営みとして捉えるならば、学術研究の形成、さらに未来の文化資源学の展開という点から見ても貴重な知見を与えてくれるはずである。そして、そのような研究にとってふさわしい方法を与えてくれるのが先述した人文情報学のアプローチである。

今回の分析では、各論文が用いた言葉の傾向の手掛かりとして要旨に、そして、研究資料として注目した文化資源群の広がりの手掛かりとして参考文献一覧に注目した。異分野間の学際的な連携を実践的に考えることも重視し、手始めとして、まず東京大学大学院情報理工学研究科創造情報学専攻の稲葉研究室と共同で、データベース構築と予備的な定量分析をおこなった。続いて現在は、東京大学「知の構造化センター」の美馬研究室と連携し、当センターが開発しているMIMA Search(自然言語処理技術に基づくテキスト解析システム)を用いて分析対象全体の構造的特徴の分析を進めている。知の構造化センターでは、MIMA Searchを利用し、東京大学の全講義シラバスをオンライン上で新たな形で提供する「東京大学授業カタログ」を公開している。教育課程の可視化である知の構造化センターの取り組みと、教育課程の成果ともいえる本研究の分析結果の比較は学際分野の高等教育という観点から見ても興味深いものとなると考えている。

本研究は、文化資源学のこれまでの展開を一研究室の修士論文の要旨と参考文献一覧という側面から帰納的に分析する試みである。また、情報学的手法と人文社会学の知識を組み合わせる文化資源を分析するための新しいツールとインフラ両面の整備を目指す研究でもある。今回の報告では、学際的な共同作業の展開、そこでの困難や発見、そして現段階での分析結果を報告する。